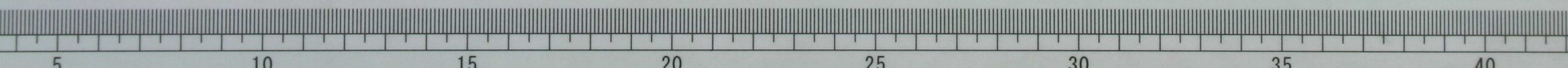




雜賀柳香箸
後堂園改區





10

15

20

25

A530
4



48-8344



羊島二



我京文社の軍師と頼雜賀盟兄の合巻の趣向は富て
 謀の帷幕の中は非して机上は廻る筆才子賣勝事と
 我里の外は毎々かそる感腹の中は取分け此度の
 席鎮ては商旗を金松堂の店頭は翻したる初編の
 出陣たる一戦は数万冊を賣捌たる群馬斯勝誇たる
 筆を任せ此機は外を賣出せと画工筆耕摺工の諸
 勢を揃へく二編の出版製本美々敷武者振の實もや
 旭の登るが如き味方の鋭気は無地あり陣笠首を
 フン出して此端書は凱歌上る

明治十四年
四月下旬

いろは妙々の伊東塘橋誌

洋馬二



士族山崎松多

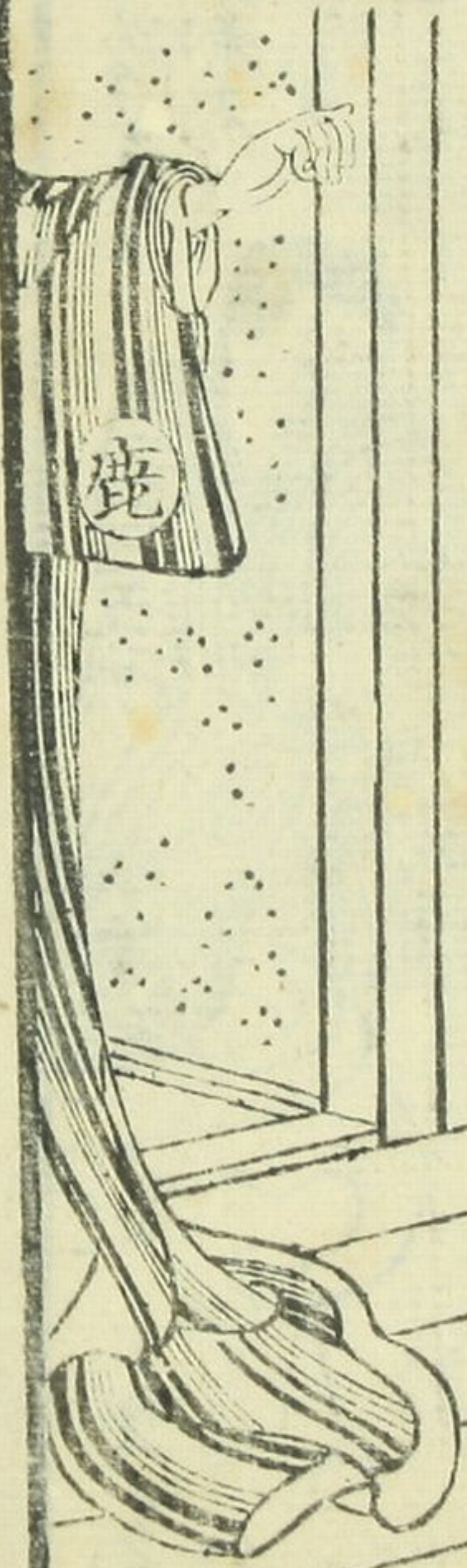
青木龜吉

群馬第二編卷の上

彩霞園柳香編

弘治の林平氏が著述且一父兄の孝悌忠信と云ふは
 して義理と礼とを尊らとまらやうな者つべし孝悌忠信ありざれば
 人となりて一身修まらざるあり義理と礼とを尊らとまらざれば
 一く美を希つるを希つるのみならず義理と礼とを尊らとまらざれば
 ざれば樂笑と後世は遠きものなり情をわたりてされば希つるを希つる
 ごとく其徳の如く不圖も村外にまゝてあるまゝに父が徳を
 こそとて徳をまゝに拍ふ長き徳が徳かともと徳をまゝに父の徳を
 もつて徳をまゝに拍ふ長き徳が徳かともと徳をまゝに父の徳を
 らば徳をまゝに拍ふ長き徳が徳かともと徳をまゝに父の徳を
 徳をまゝに拍ふ長き徳が徳かともと徳をまゝに父の徳を
 のとも徳かともと徳をまゝに拍ふ長き徳が徳かともと徳をまゝに父の徳を

夫を契りいふ
 らぬ主婦ぞと思ひ
 けりあはれ級の助が物よ
 かとうい返舞きえ哭い
 外のみみりととと舞を
 こひたるまの顔よ登方
 涙よこまかる空も墨りを
 のよとと涙かりたるやの
 袖晴
 間ハ
 所々ぬ
 風情
 ありぬ

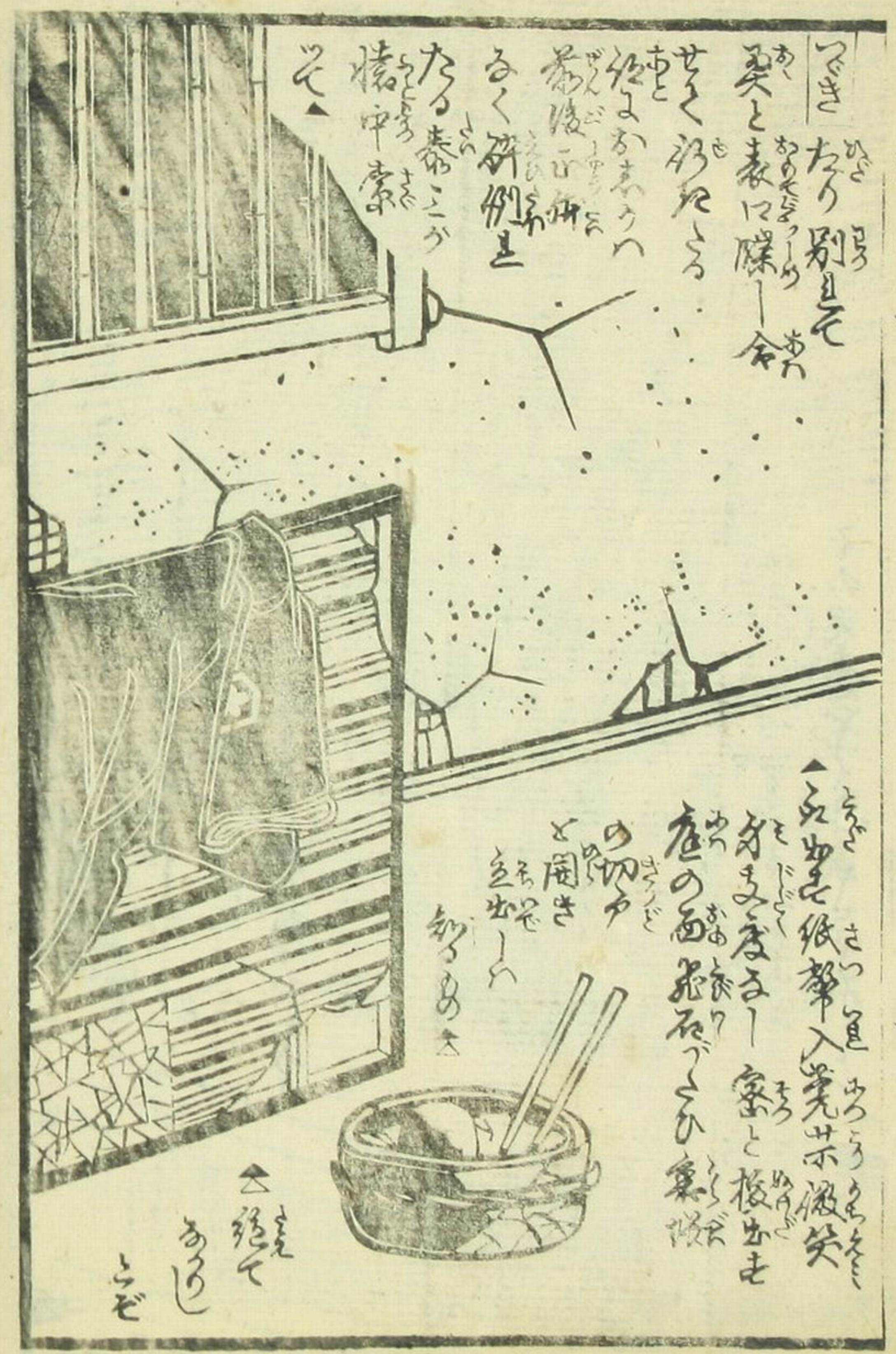


松の沢村へ送るやしが
 おとらう父長を清と
 りの須園一遍の
 男をさる級の
 助子離ととと
 腹かとうらぬ
 一と固より懐
 然怒りふ次へ

て級の
 助ハ
 理と孝
 とよ妻
 かそらと
 離別の
 ぶい決
 母ふも
 出まて
 三の字
 の離縁
 状源



君...
...



つぎ ちり別...
あま...
せき...
...

△...
...

△...
...

鳥...
...

...

川...
...

...

水...
...

...

格...
...

...

地本問屋
錦繪

...

010190513918

第...
...
...
...

...
...
...

...

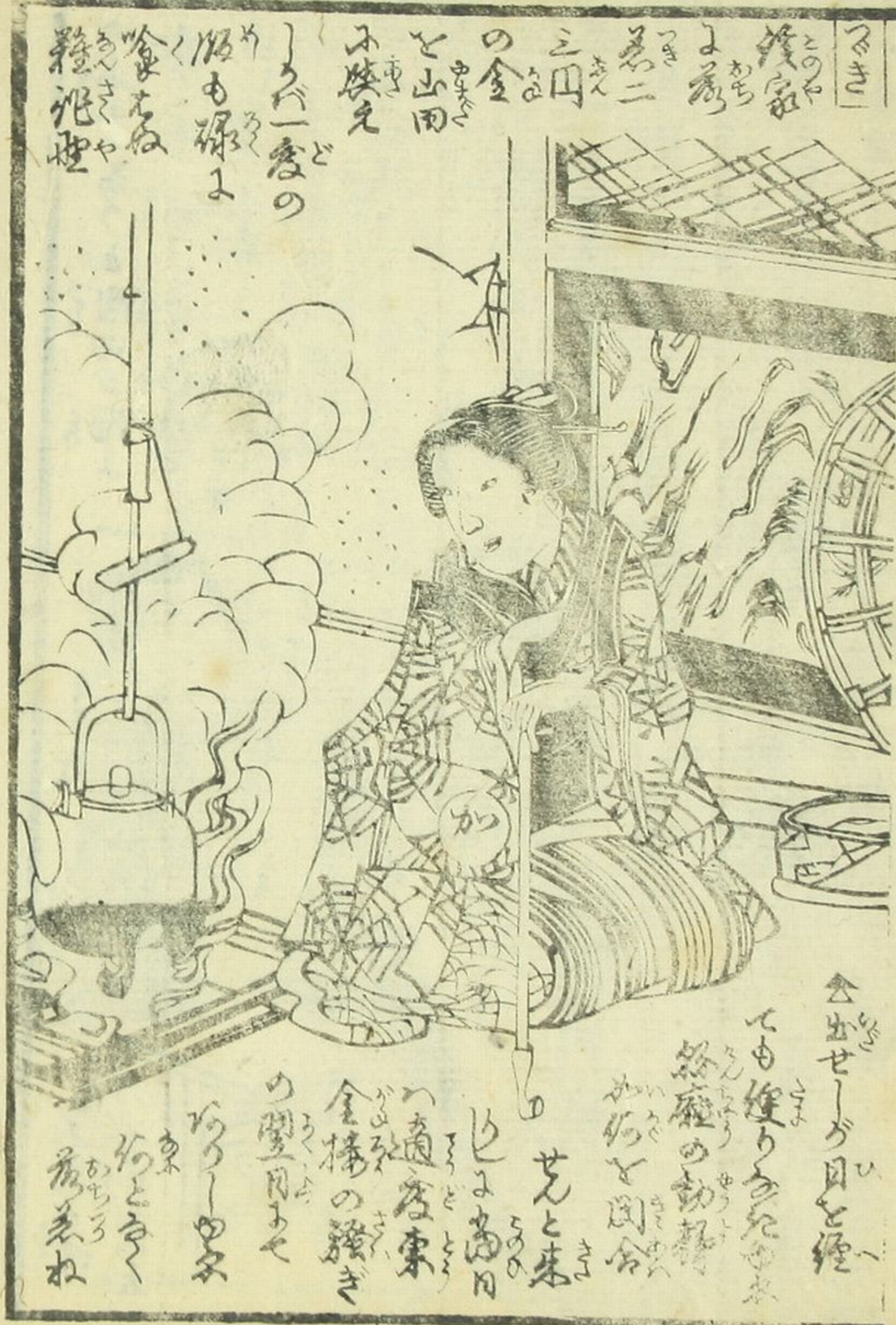


10

15

20

25



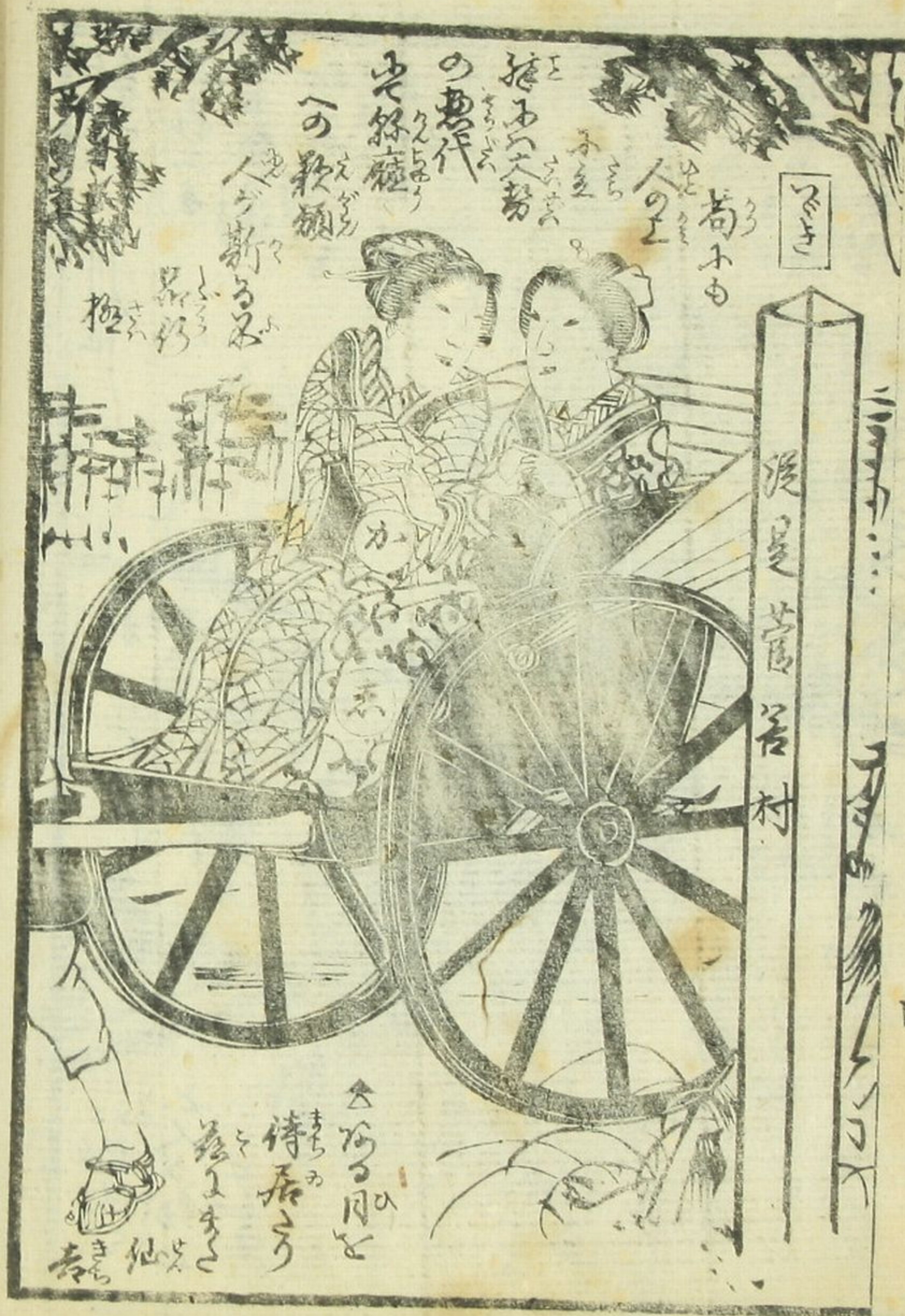
二
 の金
 と山田
 小使え
 一六一の
 飯も祿よ
 喰ちる
 糶池也

三
 出せーが月と煙
 ても煙りきたる水
 然庵の初霧
 かのと圓合
 せと来
 けよ高月
 へ適る東
 全掃の掃き
 の壁月よ
 ありーの
 何とさく
 君えね



常へ大
 悦む二云
 ともさく水
 初とて友人と
 階伏せられ
 その筋の捜索
 ふも候し
 世よりの煙
 後の其草踏死
 例一あうん
 致扱め其陸
 級浴の町四

武
 人の氣
 好種
 物格の伴ふ級浴の蒸
 せしと控入るまでと
 不子好と控白後
 包と
 二人が動止
 と不寫
 と最



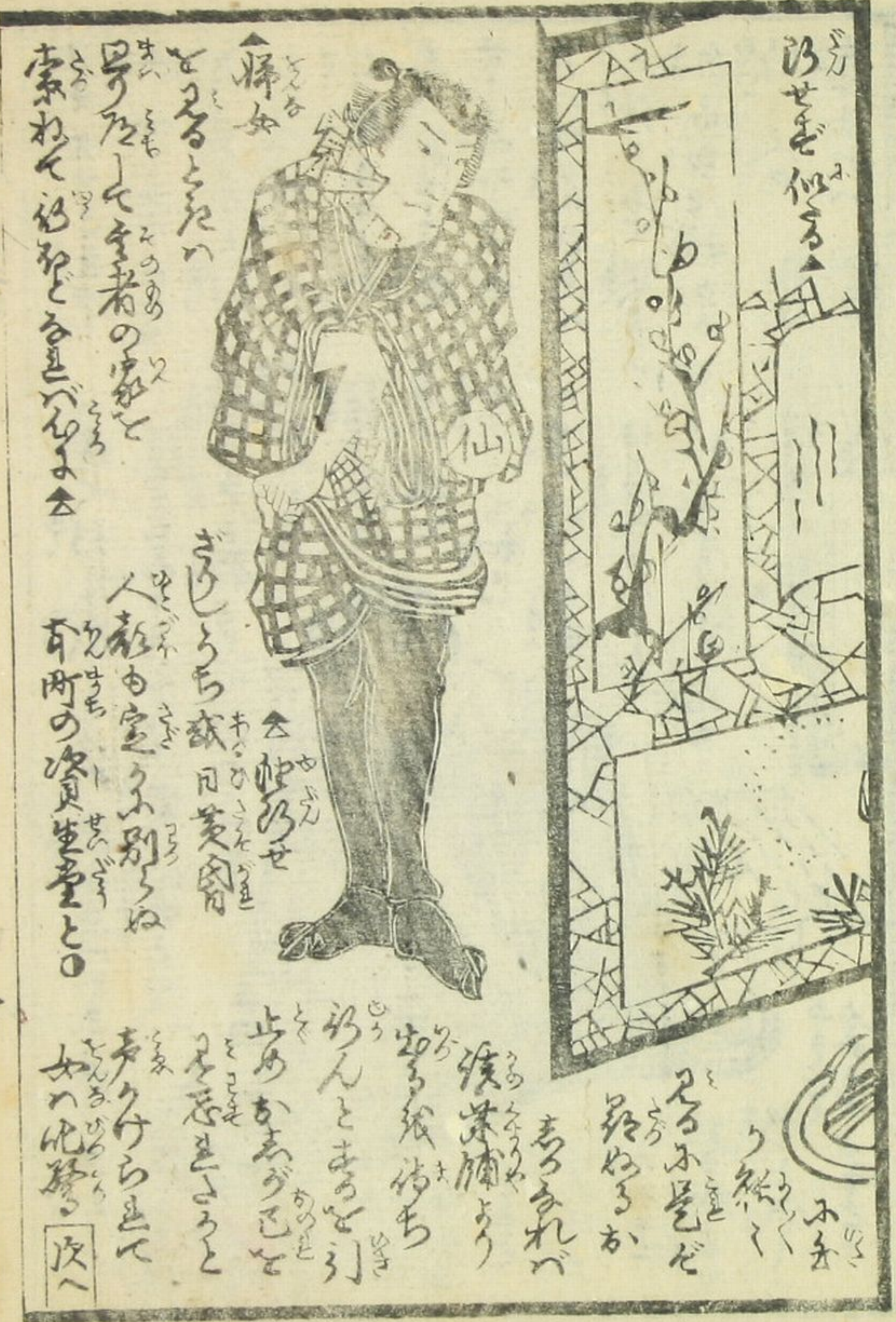


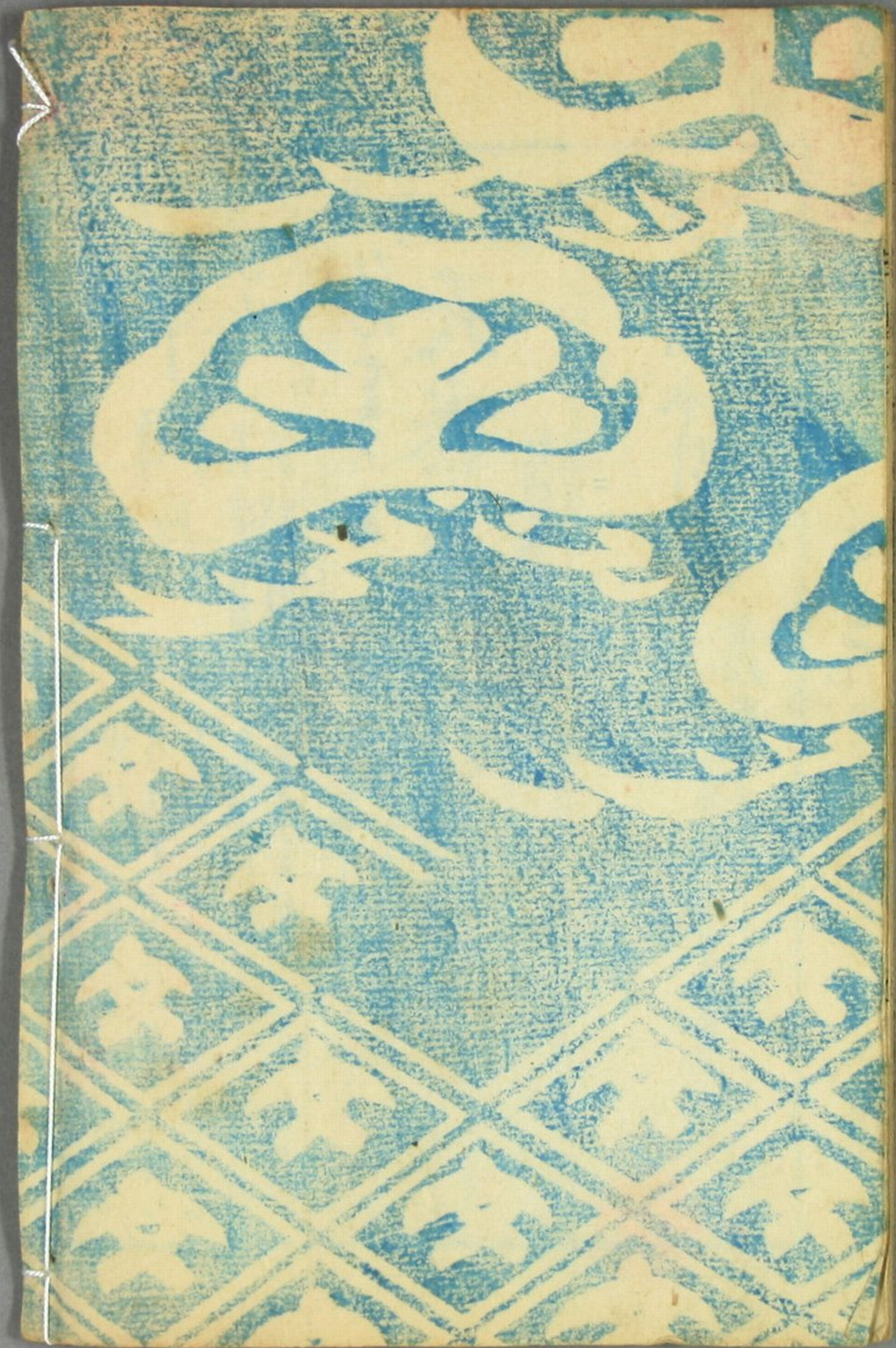
尾渡を
 腰もちをけお格の

〇お逢上人
 ふも若む
 二人の
 とおふれを
 車と表を
 格の个宿と
 さて板
 みたぬ
 春之
 尾渡
 の

尾渡を
 腰もちをけお格の
 〇お逢上人
 ふも若む
 二人の
 とおふれを
 車と表を
 格の个宿と
 さて板
 みたぬ
 春之
 尾渡
 の

群馬二中







雜賀柳香著
後堂園改画

下

10

15

20

25

つき 若馬三のままへんよ
 晩 毒よ金が八と
 頼んとんか希せんが
 七十四と果とらう
 通順よあの上客と
 若くはせと
 の一ツ由
 若く二番
 まるまを
 若くは
 久々
 若くは



よく自中よまのまの
 カア他
 のまの
 やり
 毒よ
 せよ
 若くは
 若くは
 若くは
 若くは

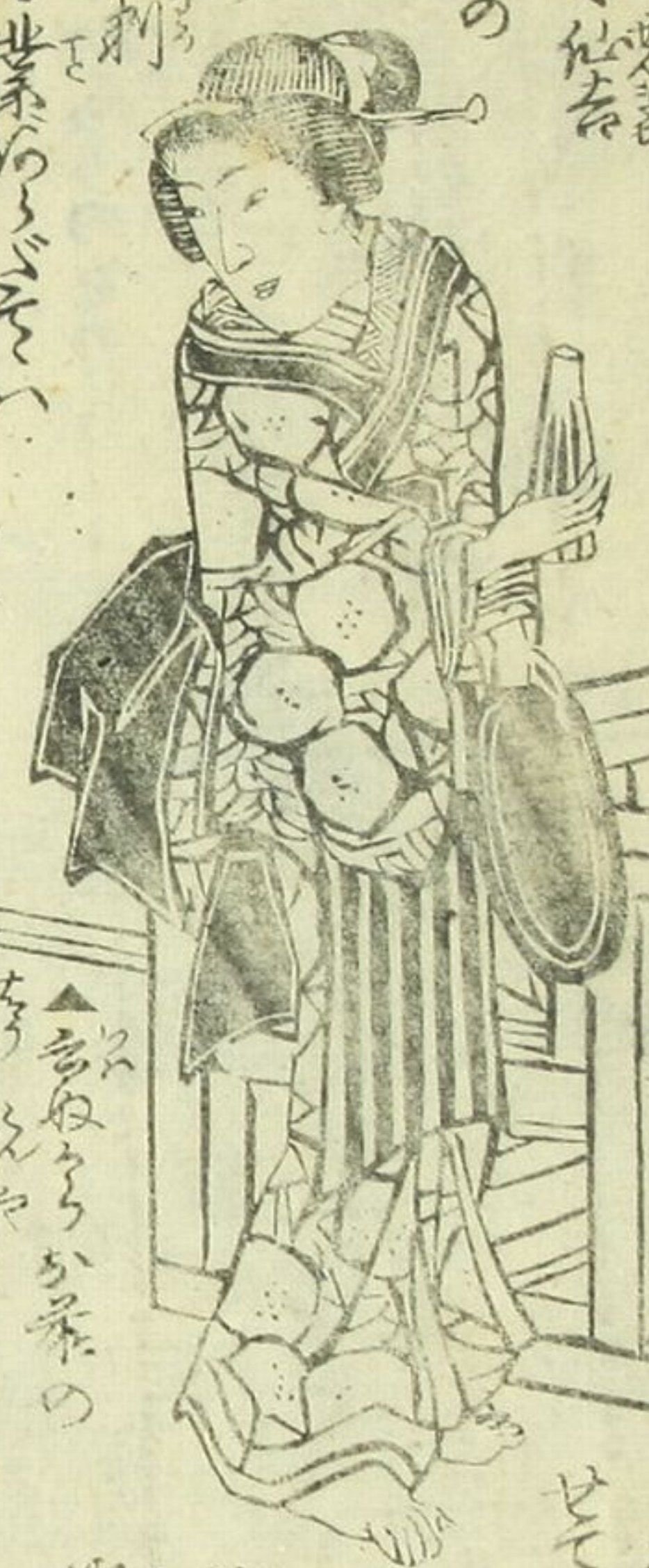
若くは
 若くは
 若くは
 若くは
 若くは
 若くは
 若くは
 若くは
 若くは
 若くは



若くは
 若くは
 若くは
 若くは
 若くは
 若くは
 若くは
 若くは
 若くは
 若くは

つき子と関紀まよ
全とく仙若

かまうの
あふふ
欺る
進と刺



紀
年久く
さやのハ
ウス七

由業の
秋の
半件は
善なる
悪なる
のよ類



方由今
のよ類

又狂化が
せそ後
又狂化
又狂化
又狂化

ツフ
一酒
月日

焼比
かりし
と焼ら
七十田
あまふ

よこの
十田
波是



△は
ては
がら

山
由活
くさ



かまの各月の
女史と捕へ
練云小一云
半の律もあ
穴へ入りた
陸君と悦入る
登さ↑の理
登く

つたが拂曉方
あつて
う金と
はか
如
南
不
ツカ
左
と直
せも

その後の
不
あ
る
業
史
大
ま
か
人
の

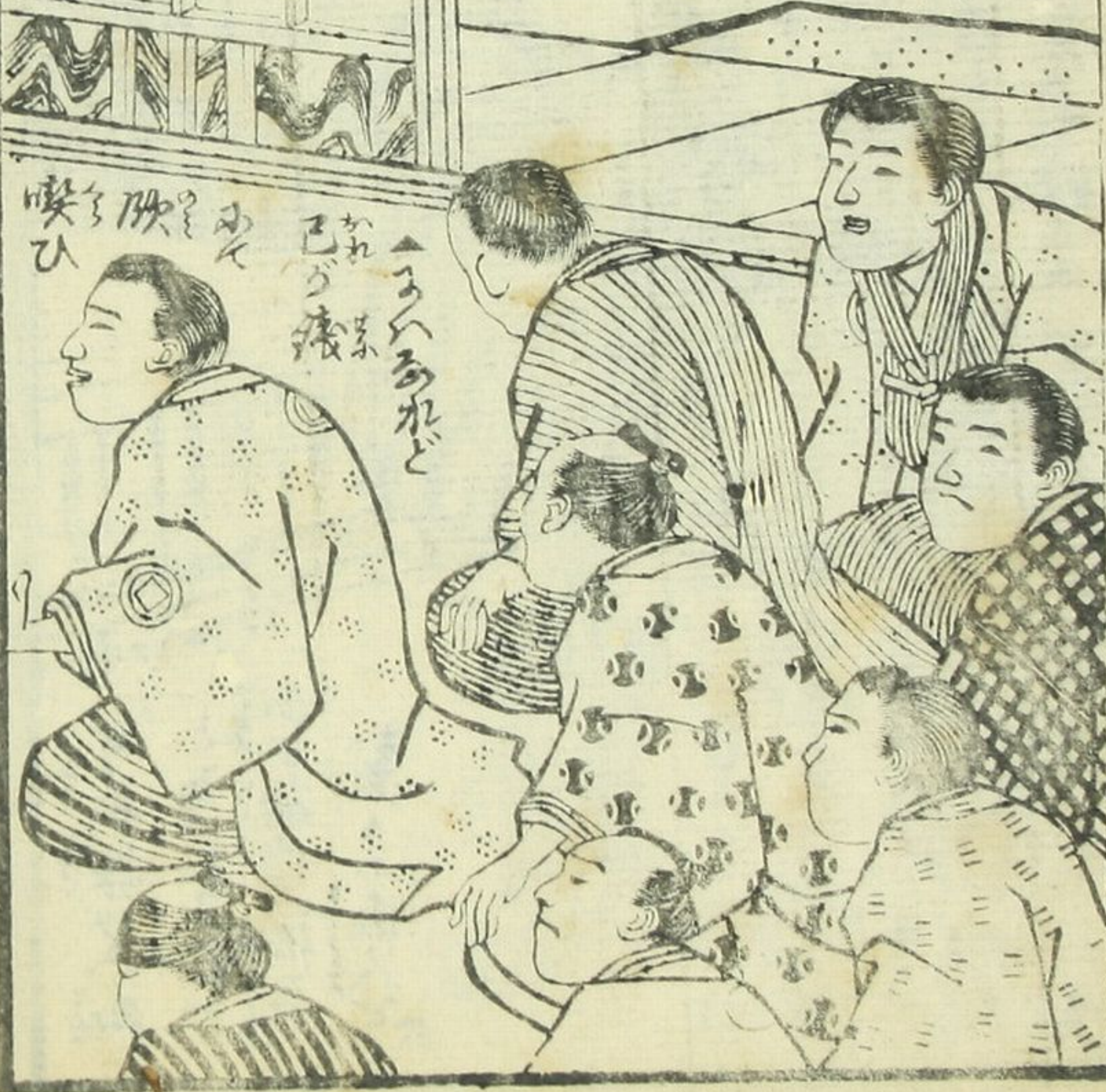


つたが拂曉方
あつて
う金と
はか
如
南
不
ツカ
左
と直
せも

つたが拂曉方
あつて
う金と
はか
如
南
不
ツカ
左
と直
せも

つたが拂曉方
あつて
う金と
はか
如
南
不
ツカ
左
と直
せも

べき 来り 湯食をひて
 借例まも二度や三度六
 借もせーが後(色)が
 朋友もそと異な家と
 るく名義をうけ士族
 くと大層らしく云福
 ま山本とらふ書生と
 借まひ月
 店を欣
 咲ひこの
 店のみ人
 へ某と



咲ひ
 欣
 店
 某

命の程と
 ありあふ酒
 合位へ酒酌
 ぬくも僕が
 名とて借
 多と大風呂
 後と羨むる
 借者か
 借者か
 借者か
 借者か



命の程と
 ありあふ酒
 合位へ酒酌
 ぬくも僕が
 名とて借
 多と大風呂
 後と羨むる
 借者か
 借者か
 借者か
 借者か

ふきらま 難儀の毎の
やく 喫ひ 酔ひ 蒸汁の
例の通り 宅へ 入り ぬ
来りて 一と ぬらん と する
神を ともめ 山田
えん余の

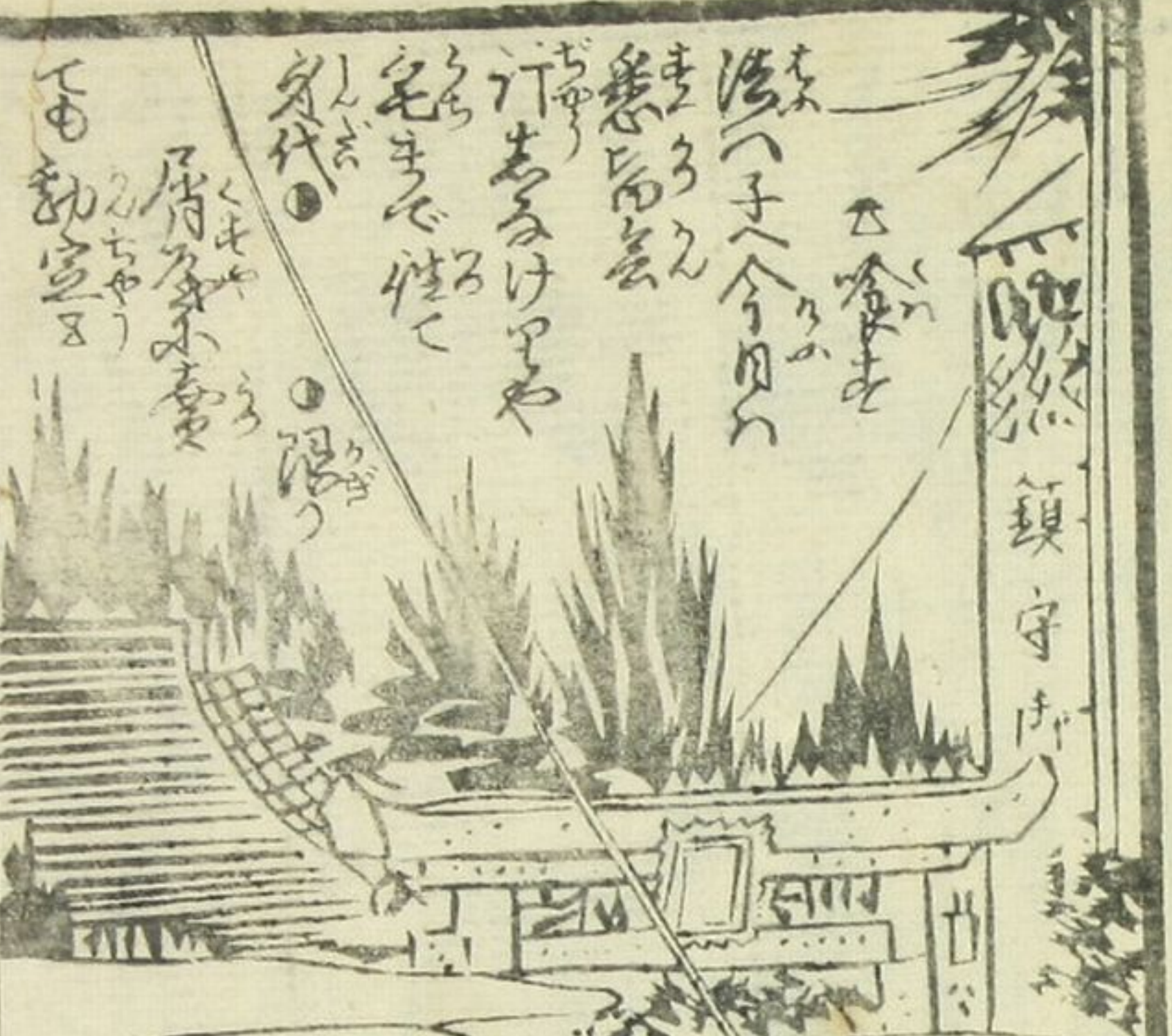
鎮守御祭禮

當村中

親の 知る ありが
高業の 高業
く、 金代 でお



肌を 現 せ ぬ
去 ぐ ぬ 難
旭 接 さ 日



この 野 祭 一 思 へ
居 る 方 々 皆 々 思 へ
侍 と あり せ ば ど ぞ な
威 一 ふ け ち ち ち
と り 種 々 々
△ 要 と 海 へ へ
△ 要 と 海 へ へ
△ 要 と 海 へ へ

鎮守御祭禮

當村中





